

三段飾り

【三段目】

- 1 鎧(よろい)
- 2 屏風(びょうぶ)
- 3 櫃(ひつ)
- 4 弓(ゆみ)
- 5 太刀(たち)
- 6 両立(りょうだて)

【二段目】

- 7 篝火(かがりび)
- 8 軍扇(ぐんせん)
- 9 陣笠(じんがさ)
- 10 太鼓(たいこ)



※6の両立の代わりに提灯を飾るタイプもあります。



【一段目】

- 11 鯉のぼり(こいのぼり)
- 12 吹き流し(ふきながし)
- 13 柏餅(かしわもち)
- 14 粽(ちまき)
- 15 八足台(はつそくだい)
- ※または三方台(さんぽうだい)
- 16 毛せん(緑の段布)(もうせん)
- 17 飾り台



【飾り順】 17・16・2・3・4・5・6・4・5・7・8・10・9・11・12・13・15・14

- ※17の飾り台に毛せんを掛ける前に段のねじれが無いかをお確かめ下さい。
- ※段と毛せんの中心を合わせ、下から上へたのみをとりながら、ピンでとめます。
- ※飾り台の組み立て方は同梱の説明書に従って下さい。
- ※木製三段もあります。
- ※太刀は柄の部分を下向きに飾り、付属のひもで太刀置台の上部に結わつけます。
- ※写真は標準的な飾りです。セットによっては写真と異なる場合があります。

五月人形豆知識 ①

高蒲

高蒲は、強い解毒作用があり胃薬として、また神経の薬には、薬効をほぐし血行をよくし、打身にも効く薬草として古くから珍重されてきました。

特に中国では、薬効あたたかな不思議な薬草として用いられ、端午の節句には、高蒲酒が飲まれていました。中国では、端午の節句には「高蒲酒」ではなく「蘭の酒」に似かっていたそうで、高蒲はお酒として飲まれていたそうです。また高蒲は「軒しようぶ」と言って、ヨモギと似て軒にさし、覆よけとして使われていました。屋根の上におくことにより邪気や疫病を遠くから考えられていたのです。又、お風呂にいれることで体を清め、疲れを除くことしたのです。

高蒲は、「勝負」「商売」「武事による徳を尊ぶ」と通じると考えられ、丁度端午の節句の晴に吹く事から「世の中で負けにくい様に、逞しく育て」という祈りを込めて飾られてきました。



柏餅

柏餅に使われる葉の柏の木は、新芽が出ない限り葉が落ちないそうで、このことから家が絶えない、後継者が絶えることがない縁起のいい木として考えられ、柏餅はすでに室町末期頃から、広く食べられていたそうです。でも今と違って中の餡は、小豆のこし餡ではなく味噌餡だったそうです。一説では、「かしわ」は食物を包んだり食器代わりに用いられていたことから、「炊屋(かしわ)」の転じた言葉ではないかとも言われています。

ちまき粽

ちまきは中国伝来の物で、端午の節句とともに日本に入ってきました。ちまきは糯米やうるち米を草の葉で包んで蒸した物で、文字通り草で包んだ物や後の葉で包んだ草ちまきなどがあります。餅には整腸作用があり、やはり薬効あたたかな薬草で包んだ葉をはがすと、糯米が餅に染まりとても綺麗で、健康にいい食べ物として考えられていました。ちまきには伝説があります。古代中国、有名な戦術家であった屈原(くつべん)という人が、策略によって敵を倒れます。屈原は失意のまま湖で水死するのですが、その死を悼んだ人々や屈原の姉が、弟を弔うため、竹の筒に米を入れ籠に入れて、鮫魚(こりょう)を祀ったことに由来するといわれています。